

朝鮮物語

上卷

U 5  
1568  
1





大河内秀元陳中日記

朝鮮物語

全部  
三冊

東都書林

誠格堂梓



朝鮮物語序

依田氏藏

余嘗論豈公之伐韓。與秦政  
之築長城一也。皆以禍其子孫。  
而其功又有施於後世者矣。蓋  
秦政糜爛其民。以築長城。遂  
致天下怨叛。子孫敗亡。然而後

伊藤  
1565  
卷 1

月洋勿語

藤森序





立法示胡虜。制其奪軼者。莫  
不賴長城為之隔。劉焉。豈公  
興無故之師。以斬伐異域。使  
我士暴骸骨於外。我民困賦  
役於內。遂至海內。愴然憤。雖  
天命自有所歸。手其子孫。亡

滅弗救者。伐韓之役。實為之  
禍也。然而至今三百有餘年。西  
洋諸戎。雖或垂涎於我。不敢輕  
肆其饒噬者。豈非當日威武  
烘於四海者。有足懾伏其桀驁  
之心乎。書賈牧野。善將。刻大



河內秀元朝鮮物語。來乞余一言。斯書記。趙公伐韓。和議既敗。再舉大軍事。白石源公。宋以修藩翰譜。則其為實錄。不可疑。夫伐韓之役。武家著者。莫若碧蹄大捷。與蔚山死守焉。斯

篇所載。於蔚山事。為特詳矣。蓋秀元在圍城中。親歷辛艱。當日情狀。皆以獲之於目擊之間。故撰寫得其實。使讀之者。至今凛凛有生氣。夫趙公伐韓。雖不為無功。於義則未為得焉。獨至其



將士之忠勇義烈。百折不屈。以全其所守。則凡在人臣。尤者為師法者。讀斯書者。其領此意可也。嘉永己酉夏閏四月弘菴陳人大雅識

*大雅識*

朝鮮物語 イニ記

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

抑 大相國從一位前關白太政大臣豐臣秀吉公者總海無雙之名將也。報先君之仇。離夷四海之逆。臣舉有德賞有功。又欲通異域富邦境。而遣使於朝鮮。而後殿下發兵征伐之。軍少有利。故慶長丁酉發關西之兵。又大征之。予太田飛驒守之在幕下。得逐馬塵。故記所親見之事。以貽子孫者也。



朝鮮物語 自序 (Faint handwritten text)

朝鮮物語卷之上

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

慶長二年丁酉三月十八日公子筑前中納言秀詮公を以て朝鮮征伐の大將軍とて高麗國釜山海の城主に任じ太田茂驛守熊谷内藏允早川主馬首篁和泉守福原右馬助毛利民部大捕付中伊豆守を以て諸軍の奉行とて相從軍勢備前浮田中納言安藝毛利中納言毛利宰相峰須賀阿波守加藤左馬介生駒雅樂頭同孺子瀨岐守藤堂佐渡守長曾我部土佐守脇坂中務少輔帰島出雲守池田伊豫守小川左馬助菅三郎兵衛尉同弟右衛門八郎



島津兵庫頭加藤主計頭小西坊津寺澤志摩守中川修理大夫  
立花左近將監鍋島信濃守小寺甲斐守松浦肥前守柳川對馬守  
羽柴兵庫頭伊藤民部大浦毛利壹岐守同嫡子志摩國主九鬼  
郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐志摩國主九鬼  
大隅守甲斐國主淺野左京大夫大小名四十二人其勢都合一十六萬  
三千餘騎

大相國秀吉公秀詮公次子諸大將を召て上意不若年を治じ  
十六歳の秀詮名代の上將軍たり法事秀詮の下知小從之  
諸軍勢上下の働甲乙明く善惡深く成悻らす有様上  
其為之の奉の靈社上卷の起澄文差と一の旨

作あり則殿中おいて七人の奉の起澄文を認め抄檢使徳善  
院民部卿法尔大野修理大夫を以て上げ奉をけふ

高麗國の軍中御壁書の次第

- 一 今度軍中諸勢上下の働明くせんさくを極め善惡を偽らば秀詮裏判を以て七人の奉行言上可仕事
- 一 十六万騎渡海の軍勢上下人馬夫丸等よむるまで一倍の扶持よす人事但馬一疋一日の飼料大豆六升米四升とふ
- 一 奉の七代手前代官而の米入次家中の人右のよむる遣事
- 一 秀詮前よ於て各相談致して多分の口上にて善惡



の落居極む事

一七人の軍勢を軽んじて成つてもの有るは於て一言上り  
及ぶに秀詮急なまら申付事

一 湖武略も舟見合もあはれ誠度の働仕る事

一 秀吉の鞭影をみてる藤國の八ヶ道を先として大明國の四

百餘州南蠻吉利支丹國其外遠るも武命を限り

小切取置異國軍兵の頸塚を日本にうけ付事且々和

漢後記の爲あり然則戦場の高名言ふ及び老若男女

僧俗も浪々次賤山うらよるも善く難切て首級と目

中へ渡るとまゝのもの也

右條に於相背を輕重に依て急度で申付もの也

古の津壁書の津朱平七次の内をゆゑはる事

五月廿日 亥辰の刻筑前の太守黄門秀詮公津出陣津門出

の津目見こして津登城四十餘人の大小名四供仕をまゝ秀吉公

津棧煙能品は仰付津小袖三百津帷子五百津單物三百金銀

長光の津太刀波おき備お兼光の津腰物津る吾秀詮御津

洋頃法大物も悉く津小袖は帷子等數々金銀と津尻は秀詮公

津座船津津下を後橋より津先陣に進ませ給ふ各大小名も

豊後橋京橋より船も乘思の馬駿舟の表も押立母衣旗指

物弓鎗鉄炮をひて舟に飾り家の役ある幕成走るか



手くくに押下出船の刻諸人の妻子今を限の別と思ひさ  
 ふや貴も後舟の決し送り出さる男の舟に取きて鐘の袖  
 草摺ふり分て同道中を渡りて舟次舟の出入成格と教訓  
 一船中より五下一舟を急で押出た暫く舟を足送りて向を  
 限りた路の舟を承り別の物思ひさみさる舟を用さるれ  
 と云も河を宇治川に飛入り沈むるあり傳へ聞古の松浦佐  
 夜船と傳へん唐國船の名味を慕ひ往方波小袖を濡し次舟  
 るに沈みしとやらんも是もあらず増さき上古も  
 今も末代も換へさき門を送り見たり泪を流しけるも  
 頃五月の空吹風ふきとて秀詮公舟船に播州大坂あり

廿三日諸船淀山崎ふゆえ後陣ハいさゞ伏見を出やら三  
 百六十余丁川水の上綿と晒を如くさき旗旗日を蓋ひり廿二  
 日大將軍公を初奉り諸大坂を船一兵庫の湊小籠を解  
 其道十 廿三日兵庫を乗出播州室の津小豆岩に 其海上 廿四日  
 備後の鞆の湊小陣に 其道二 廿五日周防上の関に著 此海路 廿六日秀  
 詮公長門の下の関より急陣 其海路三 廿七日沙領國の筑前入城  
 有て朝鮮津渡海の津用あり法大將も因元城地へ入ふけふ  
 七人の山をのび廿六日小イウウト二十里を乗渡り 其後嵯峨の関  
 小豆岩に廿七日の末明小太田飛驒も一吉嵯峨の関を乘りて白  
 柁の居城小着船を 其道七 廿九日より塩味曾酒着大豆扶持方



數百艘小積浮先立てき夜國(ど)出けふ飛騨守が祇園丸権現  
 丸と云十六人式艘の本舟小石火矢大筒中筒弓鎗玉藥其外万  
 蠟燭以下に在るまで悉く積せ切籠の燈籠突鐘をほりせたり家  
 中軍士面々の乗船小中筒玉藥私幕船戸敷の碇替櫓増  
 増梶以下残らば舟をへける六月廿五廿七頭の舟奉行在所を  
 乗出嵯峨の関小集て豊後の内竹田津の湊ふのふ嵯峨の関  
 小(此海上)廿六日沖田津を出て長門下の関小着岸に(道)暫く夜小  
 汐がまして夕日の引取小法と関の戸小乗取登ふと飛騨守が  
 大船式艘の切籠小火をくそ軍勢小先立ち日本第一の迫門口  
 恙なく業丸小迫門口より海上に化物出来てける飛騨守が

本船小少も遠ざる大船二艘出て隠岐國小差當て押けける續く兵  
 船是を本船と心得て妻子小乗以船もゆ里奉船小法きてら手  
 小乗来りもありなり飛騨守を見下知をふ一本船を乗ゆ  
 ら切落の火をけ頻小早鐘をせめ急し堅約の貝をたて関  
 せられ彼化物と連行兵船小の外作天一水主梶五増梶梶を死  
 せ一本船小押はきふけり夜中飛騨守比の島小を着りける  
 一の関より(此道)十里盟廿七日肥前名護屋小出岸に(此舟路)三十八日名  
 護屋小滞留して廿八日の夜切大小名物着到を付れる小舟は熱軍  
 勢集りぬ廿九日秀詮公御召船日本丸を見奉まは遂小沖小浮  
 べさせ給ひけるまは遂國涉渡海と涉下知の鐘を突鳴り各兵



舟急ぎ押渡さなりき州風本湊へ乗入る此を十里七月朔日順  
 風を待て風本湊の湊小艇次日數万艘の兵船悉く乗出沖  
 中ふむるといとも逆嵐暴くして舟を覆さんと故諸將又  
 舟を風中に戻次日の夜入て亥の刻計りに南嶺烈を吹来  
 て諸將風本と出船一五日成の刻計りに對る國鴨津の岸小着  
 船とけ海路十八里百對馬國三十里の灘を渡し申の刻計りに對馬豊崎  
 浦ふ志を然る如小數万人の船共明日の日和を見切て只今津  
 船をむきと一と云々と我方と惣軍成の刻計りに乗出今  
 日申の刻計りに風波小舟を任せ漫く舟船の旅前後左  
 右ふ山もあく嶽として滄海雲を浸し東西南北を舟一に船

人共云ふ京々曉成の刻計りに順風頻り吹て帆風小油取るけき  
 漸高麗國の地も近くるよにると山も見ゆるふんと云一申舟  
 の表小尚く黒く見ゆれ雲うらうと疑ふ言小數人遠見一河を  
 舟を釜山海城の足越あり一山也と勇けき船中の上下古郷小  
 艦綱を思ふをありけき釜山海より三里沖る椎本島の  
 岸小至て朝鮮の大軍船數百艘乗浮釜山海の湊口を五里上石  
 火矢大筒を打響一島八烟小あたる日本數萬の兵船海と三里跡より  
 順見一帆を卸る波上ふゆ一甲冑を帯り弓弦響筒小葉を吹  
 滄長刀を手にて船軍小取結き肯各不存の要に案のどく秀隆公  
 の日本丸太田飛騨等も祇園丸の大船より相國の早鐘責を味方



の兵船は下知し隨て順風に帆を引けり。蟬口より引けり。舟も猶遠に敵の大船を乗散し。事故あり。釜山海(乗入る)舟は後。瑞信信濃も舟二艘敵の番船に取られ。釜山對州豊壽より高麗國釜山海まで海路四十八里あり。大將軍秀詮公釜山海より入城あり。越軍勢沙汰より西の渚より上り一手に備を立己。七日の夜入る。芝居舟を焼明。八日に野陣をのけ。久々水中に立ま。免る馬を陸下。身をま。せ。湯洗ひ。足をほ。軍士の息を休む。十四日全羅道の内竹島と云所(波ふ)十里。叶海より十七八町海路を隔て唐島と云海あり。南北二里半東西三十五里あり。唐島と高麗の地其間一里半

路の海より十五日の早天高麗の兵船尺寸の浮もあ。知せき。て押並。石火矢大筒打。音山海。響きたり。敵番船の為體。頗日。本船より。履き。舟の長。五六十間あり。三。四。四。四。四。方。の。角。材。本。を。以。て。大。貫。作。り。に。釘。を。一。作。り。て。継。口。の。合。せ。目。に。内。外。より。千。ヤ。ン。と。い。ふ。拍。を。流。し。金。は。れ。只。焼。抄。の。と。く。あり。二。階。三。階。小。舟。の。板。を。を。渡。し。櫓。の。長。サ。八。九。間。ある。大。櫓。水。主。八。人。お。向。て。押。了。を。八。人。お。望。の。櫓。敷。を。以。て。自由。自在。上。押。出。し。左。右。お。取。大。石。火。矢。棒。火。矢。敷。を。お。り。掛。並。り。其。大。弓。の。長。サ。四。間。あり。三。尺。廻。りの。枝。木。を。以。て。他。り。ス。チ。と。い。ふ。ものを。四。寸。より。五。寸。より。合。せ。三。寸。か。け。多。り。其。矢。の。長。サ。二。間。餘。りの。木。を。八。寸。より。一。尺。寸。の。狭。

新編 海防物語



の三門羽を付二尺計上狭の石突をまきけて機を以て二階三階  
 乃舟矢倉より五丁が外へ射放る其外半弓ラシ弓の射は狭  
 炮烙火の役者一艘の其中に甲の緒を以て兵仗をわきはきしる  
 精兵二千三千人々々乗幾艘と云敷を志し唐島迫門の  
 海上に金鼓雷を欺て天地も崩れ計り不同き時のおりを  
 よりける日本の諸將叶舟の向い浦上皆三十五六町を隔て安  
 高麗と云湊小乗渡里峰頂賀阿波ちが舟小各集りて評議  
 骨浦も阿波ちが舟小の折あのおの山乃おとくあは敷船の大敵日本  
 ばあ小船小勢よて乗合せ戦んり成難し所詮此まの舟軍ハ  
 指置て陸地小付國中を攻侵し然るべしとありしに太田飛騨吉

云々々々眼前の敵をまきけて目も見えぬ陸地の敵を計らん  
 こと事予が分別六人得るし各々何と有るまら加藤左馬  
 介進出てまけるはれのごとく此大船其ま捨て小舟に釜山浦表  
 檣の本多小乗出し日本より渡海の兵糧船を取廻し左のバ  
 味方の軍士上下飢ふ勞を堪へし不肖の某末座の推参先  
 年文祿元年の涉征伐小舟奉り石田治部少輔和分別の甲条  
 と背き主計頭清正が意意に任せ捨身の傷忽勝利を以て  
 と云共涉奉り成小依て石田傳りの言上實儀ありとて清正  
 忠節ハ空く刺え活勳氣を蒙りぬ此度七渡の舟の甲  
 知を背き誠度の傷き仕ふ於ハ曲事よまら付との上を清



直小舟りしゆも何根共の差引次第たるべしと云々諸將然として物子者一人もあつりけし左嘉明飛弾より向く某少し乗出して敵船の格状巡見致し只んやと伺は飛弾も諸大名敵の大船小辟易し進まざるを見及て左馬介小舟をせし尤もちと乗出して巡見せしれはと答るる介は奉行の不知を更候で我舟に乗移り静に碇を引上推せよと毛利を夜も言々ふら又や左馬介平尔の働せんといふや各相談も未極らざる味方崩しの技証を一興と云ふまば左馬介ゆりくと打笑ひて一列あは短山のどくかふ大船某が五枚帆の小船ふていざ平尔の成ぶや奉引吉田波の下知と

て巡見あはるりいと云捨て二所餘り乗出しる飛弾も我舟の小鷹丸に乗移るを見くさ由津又七郎我舟も飛来急まはを何ぞ探ふもん乗出候旗頭のまは是を見て又七郎藤丸あり乗止ぶと大音聲ふ下知をわりの共跡を振向く氣色もるく三町計の内外ふてけや典厩舟も臺も並ぶる福小押付りけし典厩矢倉の棟も花より鳥毛輪ねけのる路を指奉味方けしと下知しるは飛弾舟の矢倉も馳上りて五人餘態の棒七幅も白きのもん付し馬駿を振上げて左馬介又七郎討するはけし兵船と大音の不知も隨く安高藤の湊せしと乗出する味方の兵船定綱を打切し我者らとと乗出候敵



の大船も悉く乗付りたり沈りたりとも味方の舟より敵船のさ  
 りよて二回柄の槍さへ未届ばとぞ乗入るの覚悟よ及び敵方  
 よりも日本の船の敵の大船の櫓の下乗付るに依てもさき櫓  
 かりたる味方の諸軍士極く武略を思ひたりとも更なる  
 見たるさよ軍兵共小筒をひて敵船を打て水夫も櫓末と  
 らせ浪火矢を射り炮烙火を敷き打て打込るも敵の番  
 船の中も駭くも散るも火薬も火移りて雷よりも怖  
 らる響渡りて焼くも三重三重にき渡る舟の板軍兵共小  
 舟中列落し照り照る日和めて舟の外も焼くも舟底も  
 居る軍兵水夫もよと船中にたまり得ば前後左右の地

中に飛入死する年の刻の終り末の刻の終りまで二時計り舟  
 軍に焼破乗るも朝鮮の番船二百七十四艘より軍士も少く討  
 取ぬ敵船の大敵も山のてく成た船もさよ子血音夏育ガ力を  
 尹錮周瑜が謀を思ひとも討勝難き如く大君殿下の聖運泰山よ  
 りも重く金鏡よりも望きが故に思の外も勝利を得法卒の軍  
 も物りよける残る敵船四方四面も退散をなす孫聖佐渡も高  
 虎が甥藤巻仁右衛門尉佐渡も先陣も在り停軍の姿も向ふ  
 左衛門尉も向て云らるる諸手残らぬ舟もさる名せしやよ  
 虎舟一艘も取得して舟を焼くも大抵を念ふも何の面  
 目有て後目も人目もよ某に於てハ快く討死し生前の恥



と云くわんと云くわんは孫高堅く制して曰く嗚呼の高名はせぬ  
あらまう其の上今度の以合我今に限る危うごとと云くまども  
仁右忠門尉鳥獲を欺く勇士るまを理よ退つてぞ進ける然も  
小敵船三艘引きつり退つて陸よ押寄上りけふと仁右忠門尉  
推け其舟一破引付てぞ廢りたる五里六里の海上に流ま浮べ  
る兵仗の鱗よりも多るまけり血潮を染ふして忽ち紅の波  
を流る骸は波上よ漂ひ浮き沈りけふは吳魏赤壁の古く宋  
元黄河の争を今も見くと思ひまはる十六日諸將竹島の城よ集  
て七流の以奉行軍功を合議を抑昨日の舟合戦に乗出まらハ  
遅ありまども敵船早く業付つるや津又七部ありと

て一番と定めらる乗出せ、早くりまども舟運くく故船小少  
し遅く業付つて加藤左馬介二番と秋月三郎を檣九郎三番  
毛利を夜も四番と定め大小名家中この名共を實檢し首級有  
十軍中始終の為終妻細註又小書記し十七日早天使番の早船をひき  
日本小言上り諸將けあふ津陣し手負人を看病し舟軍小まこれ  
し兵具を用意し舟の櫓楫をを調る系叔高藤國中働く人数を定  
む船手小働く軍船を奉り能谷内藏允早川主馬首并毛利宰相九鬼  
大隅守寺沢志摩守長曾我助土佐守池田伊豫守小川左守惣中川  
修理大夫伊左民部大輔立花左近大夫殿坂中勢少輔歸島出雲守菅  
三郎多信尉同右衛門尉毛利中納言輝元が名代完戸備前守安國寺陸



路ハ三手小別て働ク北表ハ働ク軍勢ハ奉乃太田花彈也加藤三手  
 頭も人坊小向て働ク定より陸中筋の軍勢也奉乃中伊豆也并  
 加藤左馬介峰須賀阿波也生駒雅樂也毛利也夜也同也島  
 津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐一手也成て東に向く働ク  
 極より陸手南筋也奉乃毛利民部大輔并浮田中納言小西松守也  
 重佐渡也桐柴兵庫頭各一手也成て東に向く働ク奉乃青秀詮公被  
 仰分り廿八右の諸將也島を出航し唐島の迫門を押渡アヤシ川  
 と云川面十八九町の大河を上り小七百押上る八月四日忠清道ウレシと云  
 所小着陣也 其道六 陸船也の惣軍ウレシ小多より野陣を取て五日  
 逗留し船中ニ之をくみくふ馬の足を休れ陸陣の用意ハ下り小谷

小乱ハ男女僧俗除多捕来る其中ハ人休常少勝もくろふシマケン  
 あり國中のふく通群を以て具小守けも者冠を奪て是より道中  
 十八里を隔く忠清道南原の城堅固也龍城以城主ハ南原判官とて  
 二番三百金筋の大將より加勢として慶州判官二番金筋の大將楠倉  
 る由よりけり陸手舟也の諸將寄集て評議小曰南原も家龍城也四  
 番金筋も二番雜兵十番上除く然陸手の備はより小取固と云  
 事危きも同々舟手も指加川て押寄座也といひめきハ兵を飛騨  
 ち伊豆ちひひるる舟也の軍兵各陸小上り殺くの兵船ウレシの傍り  
 繋ぎ道ハ必く高麗の番船乗出して悉く舟を焼破る一若左也  
 有よ控りハ舟子の軍役也何物もきや其上各馬を立来とも見く



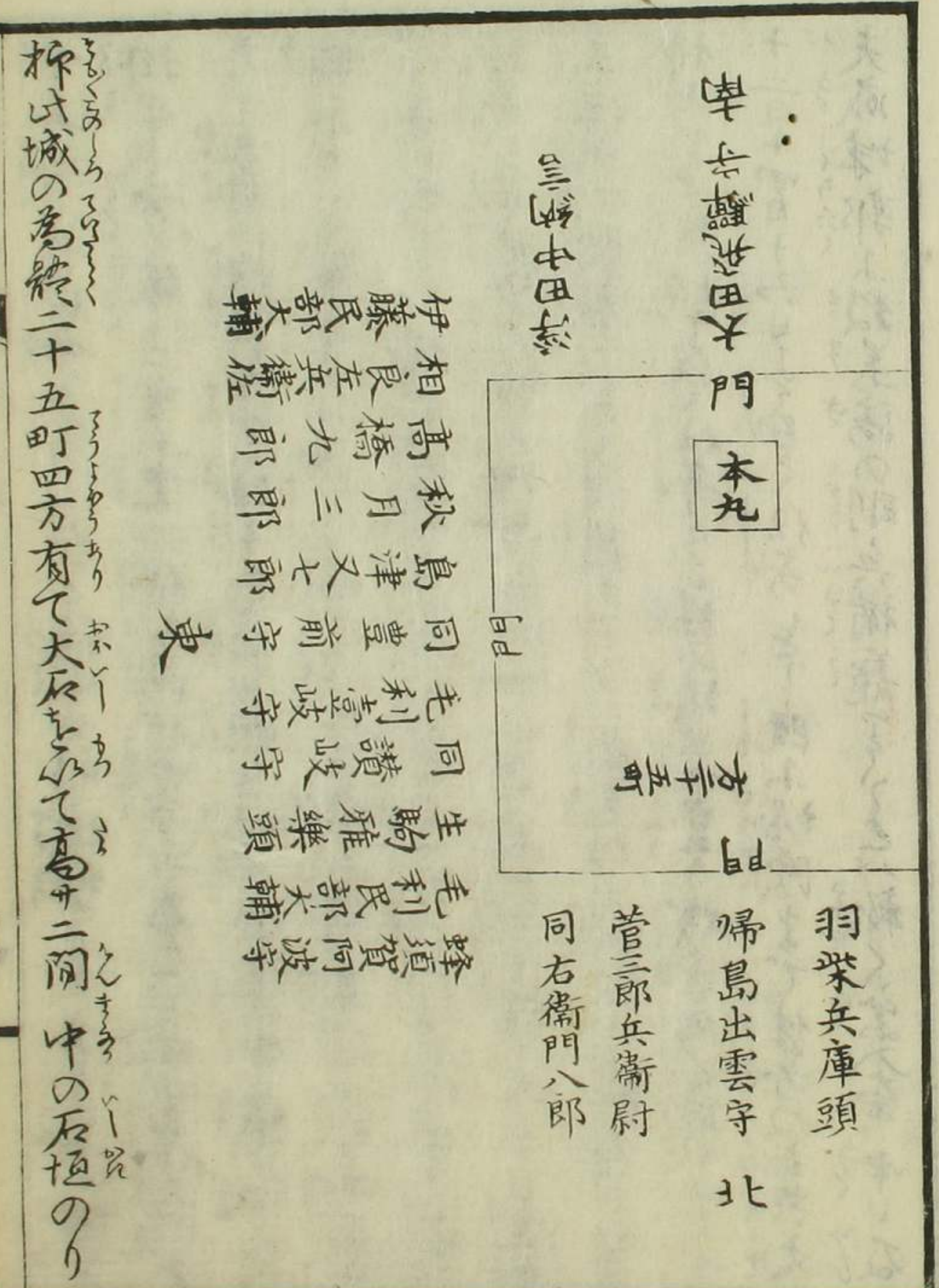
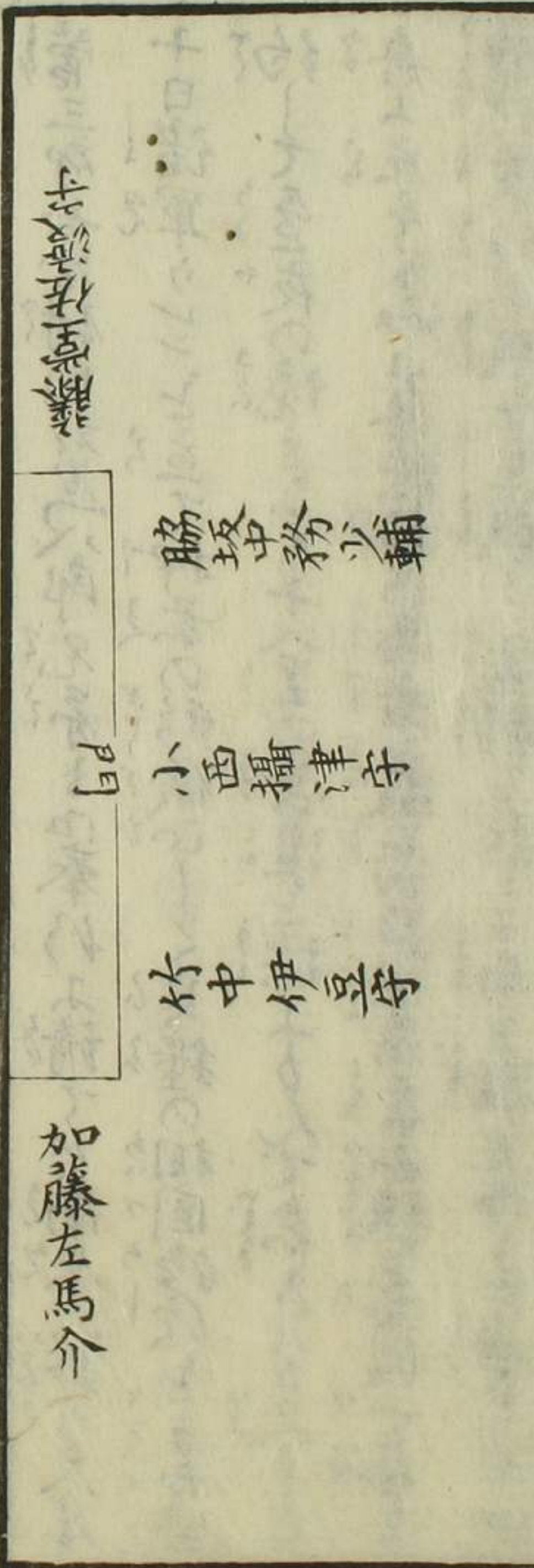
げら上り下り杖をさぐり十八里の道中お立の仕合まことしつて  
 彼令百騎騎楯落といふとも秀吉公の沖勇武天下に勝まさり  
 給ふ公の沖威光をみて神明佛陀の冥徳よけの奉り忽ち責破て  
 両判官を討ちんと勇進ぐ云ふは諸將一同不潔能もさるる危角  
 も山を切のほろ引次身とをさるる然して伊豆吉隆重内藏元主馬  
 首に向て云るは南原落城一左右の間々舟子の軍勢各ウレン不在陣  
 せらへ一彼地善悪の言上せしむる押おの軍兵を釜山海まで  
 遺事成難し舟子の内若も馬立越えさ方あはるる三人南原  
 の峰あて同道をさると云り腹坂中勢少輔伊藤氏が大捕帰島  
 出雲も三人進出て我馬と持り好も沙供中らんと云極り々々

菅三郎兵衛尉同右馬八郎兄弟も山奉り小請てど南原よ赴る八月  
 十日諸軍ウレンと立て押前の形儀正しく貝鐘の相因攻次を合堅  
 約して昼夜の境もさく十八里の其道を操りもんで急きさるる久しく  
 舟よ立ちまゝみは法勢の馬岩巖石の難空のさ山坂を云は一息も  
 暇も乗程小或ち乗殺し乗倒し死する馬を数とあはて翌十日の  
 寅の刻ありは南原の城近く急はめりといふ共以の外霧降くた  
 の遠を計難し依て生捕し尋て城よりも三十余丁が外の坂の麓上  
 旗を立務の晴く候待妙よ末の刻けりり四方明も成るるは城十四  
 五町が間小屯とさるる明十二日の曙の霧と味方に城際へ旗とよせ東  
 西南北とさるる國と熱軍の表も柵逆茂木と付と一登の馬がけ夜



討の用いしき番外河の張番ハ云々乃ハ舟を衆中焼明しるる  
 加藤左馬介ハ清平の大將として城中より其間十六七町隔て少  
 一山を備えて前後左右ハ大柵三重付と一口を千鳥山付遠用  
 心嚴者陣をとり

南原の城取寄の圖



新編武藏野

卷之五

十三

柵は城の爲終二十五町四方有て大石を以て高廿二間中の石垣のり



宇不築くて石をよきつゝあを法に焼物とくありよ不堀と  
 掛一一方隅二重三重の櫓を何げ四方より高廿七間の石の大門を  
 たて大角の柱木を以て格子の扉を造り堀口五十間の堀の中  
 堀あり不堀とのけ一堀内外の堀は狭の車びしを明ら  
 くまはちし堀裏の櫓小石火矢大ら大同木と仕つけ四方  
 打出し手堀の小崗を打矢を射し車雨雲の海がたし東西  
 未仕方の用意も見之成然もとも南表の三以十二日の夜より  
 竹たばを付初め仕寄る堀の填草登り棧子悉く用をこして  
 十三日四日十五日よむ仕方をし既小堀際まで付あぬ去共丈  
 夫成味郭小教系法の剛兵楯籠りしとバ軽く突入軍中及

鞋く見之系知不依後ちが軍士藤堂兵衛尉後成細らよて  
 朽火矢を放ちけるがたとひ焼草を持し火を付り共焼  
 付魚よふあしはふ不依火矢まで未申の角櫓を焼立り  
 飛弾ちが軍士是を見て火矢よき焼立と云りと思ひもあ  
 りはふま大河内茂右衛尉田中小左衛門尉よ向ひ云る藤  
 堂殿八乗今と見えて櫓を焼立るぞやと云れれ田中  
 関もあつて世念ありと云候ふく堀あやまを飛入ける大  
 河内九津見兵藏清水弥一郎豊島金右衛弾塚源四郎押津  
 ひて飛入堀の中ふ不堀を築石垣不付るも又小堀塚登棧  
 を持居るも我組改りし貴志六右夫を呼んで待居り大



河内其核子を以て石垣に打掛登んとせしは彈塚大河内を  
 押のけ先(電)りたる次は大河内より其次は清水乗より核ハ別  
 踏おつり其より四五間西上核を以て豊崎九津見乗たる跡より  
 大勢我者らと押合操合ける極小竹の核おつりたる大河  
 内大音揚る其旗早く入るやと云々は九津見元來旗なり  
 るれバ尤と云て不知を以て核を短し堀ハ高し入るて見えけ  
 る者共人の肩に乗て核を以て八月十五日の夜亥の刻のりの  
 事るるに只五人先乘し大音聲を擧て南原の城一番乘を因  
 飛彈と名乗而て我名を名乗て関のありを以て河内よりなる  
 飛彈も二幅紺地は白く丸の内は文字深付し旗五本城

中の焼く矢倉の隣に立忍西の夜風不敵し諸軍の鏡と頭より  
 城中俄の関の聲不絶し堀裏の軍兵悉く裏崩して戦色き散  
 るく思の外は乘破り門を開きけしは飛彈も元來武勇や奴の大  
 將多れ軍兵も立纏ひ南大寺の大門を驀地に乗入る貴志六  
 太史一番首の高名も三の丸に地つて早八方を焼討と如く佐渡も  
 が先多藤堂仁左衛門尉同新七郎同化兵衛尉藤島與左衛門尉白地小日  
 の丸五置たる一流の長旗を先立立志ゆくと乗入る腋板中勢少補  
 が紺地二幅の折りけし白き輪遠の付る五本の旗浮田秀家分主  
 浮田左京亮戸川肥後引續乗入り尤も向城内々餘烟十方不  
 散乱せしは籠兵途を失ひ城を指て逃るもあり是ハ西表の小



西橋津ちがひと散ら切拂て退きける残る精兵方之馳教て入札  
 色標合せ火と出でて戦ひ大河内も向敵二人討ちて今日々八月  
 十五日赤木氏神大菩薩の淨會日小島まると屹度思出て血力を  
 打捨紅玉漆るる堂を合て遠く日本をぞ洋るる相鼻との尺貫道  
 の鼻紙入小差多くとある士町小駈出て見ま敵五十騎計真黒不備  
 たり大河内ゆりを見ま傍輩二人も足は浮田が軍士三人より  
 大河内彼小向てあの敵小馳向んと云々北浮田が軍士をあの五  
 十騎計の軍兵小安立の士二人三人駈合て何の用小立合先号小  
 扣く味方を待掛り恰と制しけしと手の手にひぢらば立立みん  
 ぶ如小彼五十騎計の敵乗通る大河内二尺も守の刀を以て馬上の敵

の右の股を切て落し只一討ちて股たれは落し敵は左へ落し  
 三をどあよりに立ちし士共其首を奪ひぬ馬上の敵を討ちけり  
 三人切落し四人小當る敵を切られ股の皮も討掛る左へ落  
 けるを大河内其次を奪り下と走りあふを續て乗退敵の  
 小當りれ捕びたる其間又首をも奪りたり斯りける新小傍  
 輩長田五兵衛尉打後ま在られ大河内田中少左衛尉向ひて  
 ぶら長田高名を仕後まよりと見たり力を添んとひけし  
 田中尤も馳出るれも騎馬の敵二人出来り乗退知を田中鎗  
 提て刃を抜き突く敵よりよめて田中が槍をひけしのみ十四  
 五間計引どり候して馬を早めて退りま人の敵も大河内



弘ひけるを敵馬はさしはふ衆も後折ふ劔を抜て切拂ひ掛通  
 らんとを敵の劔先大河内の手の甲に當りし切て刀は片く切  
 あて一鞭打て垂ゆる敵馬味方々歩立まきバカあく討あり  
 しぬ大河内長田向て此ハカあり手を明ても如何ある其  
 高名を以て道ふまを遣とて長田ふらの内を逃ぐる長田大  
 後て五難き山心入とを戴る扱其よりけ彼小働て侍衆小池  
 八郎近藤甚な痛つ耐深井を忠討あ合るれ大河内四人の九  
 駈たぐるふ深井五六回ふ棟仍十アふるちうかんふ危りたふ家あり大  
 河内飛り見るに壁中中人まふ縁の言さ六尺計有て四  
 方壁ふ塗立り其壁を蹴けふ見まき長七人計の大男真黒

小鎧る朝鮮人三足鯨りの大老方を抜殺ち切て出深井十文字  
 を以て渡と突如を如何しをまん朝鮮人鎧の袖よりし草  
 の貝打を引切て中必引抜打捨ぬ二番ふ近藤二尺計の中身鎧  
 を以て突々進まきをも袖よりし中必引抜けけ大老方打  
 振て切掛りし成見まき只仁王の賜き出るごとく如何する天魔鬼  
 神より共欺く程の體ありし四人とも切立るまき何れもさし  
 押付を見せりこれ終末十夜の日も亦く澄海り四方櫓家居ぬ  
 の光より白雲のしとくゆきやう成ふ船て大河内を返るを彼大男  
 抜めうけくる大老方を以て大河内を推形の甲のまをうけ建渡  
 六寸計切破二の大老方て射向の口を儘より手先の籠まき筋



遠み切付て又素手の小手を續々て二刀切付り味方、此は切き  
くありき大河内為方を失ひしう飛入て敵の面刀を切付られ  
少しひらむ如く飛掛り突倒し上り榮き胸板刀を突立二二三  
貫くと息きられ居るは、一水比新八郎、歸り来て敵の胸板刀  
突立する大河内、刀のこを居けて三刀切て鋒を付き大河  
内が弓手の大指を二つ切破大河内敵の刀を奪て立上り、雖も  
ても手をくぐりてく人あゝ、バ急き此首を、此は、奪首を公掛て  
味方打てる臆病者飛驒も披露して切腹せんと思ふ、源  
井左衛門尉来て大河内腹立を極せりひく、と、勲息し、  
一菓を初て悉く退く、と、心を返し、公若辛の手柄も悪く

誰か此者小手掛るもの有んや、此は、あ、鼻捨て大河内、若黨  
持せよと、さる、源、六郎、と、定、輕、思、て、腹、差、を、披、鼻、を、あ、  
んと、大河内、彼、死、骸、を、見、ま、け、錦、の、程、う、り、錦、を、忘、る、事、  
朝鮮、あ、て、平、人、お、昨、む、と、集、く、聞、く、ま、わ、何、も、六、郎、其、軍、士、の、出、立、  
自、餘、の、軍、兵、お、替、り、し、り、其、首、小、池、を、無、源、井、が、其、共、を、付、  
て、懸、し、と、云、々、れ、深、井、尤、う、り、と、く、宵、と、共、み、頭、を、削、て、大、河、  
内、若、黨、掠、本、三、藏、お、持、て、多、大、河、内、其、具、足、肩、お、け、来、る、  
し、と、云、々、れ、三、藏、引、立、ん、と、け、共、中、に、重、く、持、得、さ、れ、バ、  
切、つ、て、半、分、持、せ、り、然、る、如、く、峰、須、賀、阿、波、勝、豊、が、軍、兵、鐔、本、よ、  
里、刀、を、お、来、て、大、河、内、が、討、た、れ、の、刀、を、そ、り、お、く、清、明、日、八、早、と、返、并、



申さるゝと云へば終ふ返さざりけり此時飛驒と一吉家中の  
 士より知して回東西兵勢の軍勢今を盛と乗入る名うせと  
 見たり予が軍士八番衆の柄持して高名不構ふし首級十  
 五二十の外へは其上和漢の古より乗あ早兵軍中不高名敷ハ  
 るきものかり若味方打河は詮か上下の軍兵引纏ひ子  
 の刻の既ふ跡小屋引きたる一吉軍士を召て城中討泄せ  
 し落兵味方の勢を計て是夜討し来る事と有べしうぎの  
 番外圍の事ふ油断まへは足輕共ハ柵の内は張番小屋置て  
 篝をあげて焼せ何も馬を放さば盗まばら根ふまへし  
 と堅く云付しきりり小比深井近藤大河内ハ少し跡より出

城しるゝ大河内が道具持ふ今若と云者よ云付繩の端ふ石を  
 付てお尻あちして乗口の石垣とせせく本陣あけりたる死線  
 ち本陣の白砂ふ篝火を焼せてまへに不斜々しきふく四人の  
 者ふ洞を樹や何あち乗石垣の高下ハ覺さふや各々ハ買  
 ざるやとそり深井申さるハ乗口の石垣只今大河内うせり好ま  
 三間半ハ又二の丸に於て大河内強力者よ渡し合せの甲四ヶ所  
 切れりきり手きふ矢手二ヶ所首深不射込まじり異儀を  
 く敵ハ討留いと披露を大河内細地の錦の鎧半分を拵し  
 實拾ふ入けまハ飛驒守と悦喜有て首ら明日持出し其を  
 あげよふ取扱魚くは必大が盗りのありと伝へりては



十六日太田飛騨も小屋へ竹中伊豆も来て諸手の人較高名實  
 檢有大河内高名爽之洗ひ筒小包来明より持せおろ小屋  
 の入口居るに飛騨も其方高名より注文日記しとより  
 大河内あり夜中上より如く鎧諸人替りて異國本朝浪  
 らむ錦の鎧直垂八平人飛びと申傳へ若大将よてもして  
 備の爲然もいづ生捕の軍兵小出りて有ては如何とさう  
 て某が身の爲中上より飛びと云々も飛騨も伊豆も尤も向  
 へして大河内高名とさうきとのふ載て本陣の白紗ふ居  
 置て生捕共を召かへ此首の名を知り書認ひきゆ通使を  
 びて云聞ん生捕共是と見て怒りてる氣色も有涙を流せ

者もありしが筆を添て慶州判官馬上二騎の大將ありと  
 てふ事より飛騨も大方候て味方十六方騎もとて一番葉の  
 上小割大将を討と事相漢の誓何事と云ふ如ん二人あり  
 手柄よりも言上の目録も書記とてとりて又大河  
 内筆者の筆を押さへ伊豆も及中上此首飛騨も及中  
 の生捕計してら出たり一言と有て後日若大将を殺との  
 ころして疑いも申さるる後悔もなきも諸衆の生捕をたか  
 はしめさるる徳大将も悉く見の上目録も日記有きや否と  
 云伊豆も深く感とて最後の一言とて無類と思ひに今今の中  
 には私事尤も極せり所色来若輩もて飛州の山島より大



忠たり太田殿の目を掛らざりと殊の外に驚らまじき事あり  
 以奉仍より諸大将(生捕)を召連早く来る迄と觸し随て諸  
 將を驛ちが陣(集)諸子の生捕を人替は右の如く書  
 記しこれ則目録よま付り諸將羨みて太田殿を二人前の大  
 ざれと感しける飛驒も伊豆も南原判官も如何よしと生捕並同  
 陣の門より切抜出ると其の情をばと答ふる夫が諸將皆本  
 陣ゆりしに藤堂佐渡も遅く来て座しつゝと飛驒も大河内  
 小指差して何小佐州あの方予が家中小於て一番乗して然も  
 大将を付りつゝとをば佐渡も大河内小向ていさ来る若年ふ  
 るを重くのち柄ありいさ先乗あは能存知くどし飛驒佐

乗あより某が案を披羣早うりしと云大河内聞て夫は山寛遠  
 とい我等五人城中小乗入を番室のて勝関を揚しよ水本  
 の軍兵堀の内堀の外に圍を合せ依る左太の勢續けと何り  
 ころ某がその軍勢未乗入さる飛驒も八三の丸小乗入十方  
 小火をうけ焼討被り其後諸子よのころをいさ事と云と答はれ  
 佐渡も人の外小立服し汝一番乗と云ら傷りたるし何りも知  
 と高聲に忿怒を大河内聞てつゝ佐渡も我もを料とい東者  
 いひ高居しうやまき田舎その高下の洞を知り其方と海言葉いん  
 得ん夫甲冑を常しく戰場上候て不馬をた武士の法あふや其  
 方らおのきの若言小驚某にいあをとりも高く云をよ九津



見清水豊島彈塚未希く如何に佐州諸人眼前小頭一率我候を  
申ぬ物と云ふ云々佐後守外小逃す詞もあく刀を奪て出死  
しけり藤嶋世左衛尉を使者として佐後守方より死驛守方云  
誠々々唯今若き人小卒尔の事を申上げ面目を失ひ陣前油  
里穿鑿つゝいひ彼人の詞も少も遠く何れも五人の口上を仰和げ  
らる願ひ某が乗船も貴老同士の言上上於て二世の山芳志と云  
又伊豆守及民於大浦及頼公との趣を藤島直談上申上る飛驒守  
五人を召て藤堂方より早くとあそめ何と云り五人取り遠く日本内地  
を離れ角名城を先乗仕難く攻落し名譽を奪り早くと  
き藤堂守をも同前との事従今願を八度別らひ共い尤と申

上難く其上公の御前下て偽の言上有る爰由法折誓紙を上し  
と承り公儀を掠りし小事も半難くくいと一同よぞ申上る飛  
驒守藤島小向て吏と五人の者共口上を具小佐候へ語と云り  
伊豆守民部大輔が云けふ如何藤島佐州有様上二番乗の言上  
小記と云一と有しは藤嶋畏て既小月録お極ふ尔小飛  
驒守右筆兼原宗右衛尉村長田五兵衛尉左右小畏て日記を記しけ  
るが長四草を止る某昨夜討後を中いれ大河内高名の内を某  
小興いと申上る死驛守伊豆守民部大輔大上感し大河内能く礼  
せり又長田有様小云々申上討たしよりい手柄あり大河内  
が首名を三つ長田が首名を三つと記さきとて頼る死人の首一つ



入て日記の教子足りりり

十六日太田飛驒守竹中伊豆守毛利民部大補諸軍の高名と実格  
軍中の記々細小注文より記々

一三同 上高麗南原城慶長二年丁酉八月十五日亥刻落城  
一番 太田飛驒守 家中先乗

首二討取 越前國住人 九津見兵藏

同三 内ノ大将 慶州判官 三河國住人 大河内茂左衛門尉

同 一三同 近江國住人 豊島金右衛門 清水弥一郎

同 一三同 伊勢國住人 豊島金右衛門 彈塚源四郎

同 一三同 紀伊國住人 貴志六太夫

同百十九 飛驒守手

二番 藤堂佐渡守 家中先駈

首三 一三同 近江國住人 藤堂仁右衛門尉

同三 藤堂新七郎

同三 美濃國住人 藤島與左衛門 尉

同三 近江國住人 藤堂作兵衛尉

同二百六十 佐渡守手

首數六百二十二 備前中納言手

以上南表三頭合首數千一

首數六十四 竹中伊豆守



首數八百七十九

小西攝津守

同 九十一

脇坂中務大輔

以上西表三頭合首數千三十四

首數五十一

加藤左馬介

同 四百二十一

羽柴兵庫頭

同 四百六十一

歸島出雲守

同 三十八

菅三郎兵衛尉  
同右衛門八郎

以上北表五頭首數合九百五十一

首數四十

毛利民部大輔

二番同 四百六十八

蜂須賀阿波守

同 十一

生駒雅樂頭

同 八

生駒讚岐守

同 五十

毛利壹岐守

同 三十

毛利豊前守

同 三十五

相良左兵衛佐

同 十七

島津又七郎

同 三十五

秋月三郎

同 二十五

高橋九郎

同 二十一

伊藤民部大輔

以上東表十一頭首數合七百四十











正が先手の大將山内次清経伊地智次郎を信経を初として軍士三  
 十八人討死を一事軍士大河内茂左衛門尉敵の大兵小組しつて既小  
 危き知小乗る敵の勝りも手を入てけ返返しつとせしがたまた  
 げに小刀の柄手ありしは引抜て獲のちもより不通し志  
 むかにあがりなき敵は兼く立上るを則敵より起さぬと終其  
 大兵を討ねぬ大河内が具足胸板忽紅小ぞ成小其時大河内  
 三間半の志あ組る敵小推碎れし幸と打止て敵の持る槍  
 の朱柄九尺小次く白き四方の角は絹十三中あけてぞ指りけり一  
 吉が家中小首數十八清正が家中五十一討たる其日千三と云所小  
 陣に其道六里爰小三日逗留一昨日の手負人を看病に五日フシキ小着道

四 六日尚州小陣を 七道 七日コラン小屯を 八道 八日千三小著陣を  
 是より帝都終七里あり一吉清正逗留一諸軍の奉るを待帝初を  
 攻きと在陣を切て徳子の大将幼子千三集り評議末極り  
 難きまに峰須賀阿波も豊勝もろろ此處渡海の軍勢船軍小勝  
 利を得て南原の城を棄れられしより帝都押寄初と打破て  
 當年三度の吉吉事の言上然と一とらなき諸將睨合て是非  
 の返答あまふ小飛騨も一吉阿波も豊勝が伯母舞もに依て自  
 餘小批判せん為小飛騨守らふ阿州口上岡分次舟軍南原の  
 ち夜叔宣の城を破られ是三度の吉吉事小水や其上千三の山谷小  
 る主計頭と某と大敵の伏しのり危き武命を捨れ諸大将數多



一といども朝鮮大明までも名高き主計討死物の教ふあ  
 らねども某も共彼地於て討干渉時々味方の競ふ所と  
 一其ふ多吉事小無いゆは抑帝都を廻り川面三十余町  
 の大川ありと聞氷いよ厚く時既上寒此寒天小向て出老ハ  
 横帯をひき馬太股をせえて氷を割り氷を渡り人馬忽  
 小凍て冷ふ武命を川小曝何の益あふき縦川を越得  
 多り共敵小打合事成難く一又帝都より二百六十余丁をほ  
 る斯長陣の時目を送るといども帝都より一騎の軍候も出さ  
 ば事如何極不審より先上意其趣小死に只命を全一そ  
 勝利とゆふは幸甚あるは是より引取て数日の長陣苦勞の人

馬と休め春陽氣小向て諸勢を進め亦小帝都へ押入て打破  
 一何の子細有る各如何と有るは諸大将一同小比類なき  
 言葉尤と答て各陣小を極りけふ爰五日逗留小細の  
 士下寺と山谷小分入て濫妨一生捕餘多連来る小依て帝都  
 の極を尋聞バ都小大明國より加勢として國王二人来りアハ麻  
 老爺王とて馬上四十万騎の大將ハ胡老爺王と云は十萬騎の大將あり  
 其外將軍判官諸軍兵悉く競い集て王城を守護一日本の軍  
 勢を都小引交實否と一戦小決せんと鋒を磨き旗を逐き楯を  
 ぎ物の具小風と引せは待ふと語る諸將上下あままで是を  
 同胸を冷して云ふハ此一説を聞ふは小飛驒守常陳と下



知さる事一々天晴文武あ達の剛将八世祖光武の心根を写し得る人ありとを感しけふ

九月十四日諸将千センを立此富有的の地と見へて家敷十餘万間あり則放火して又各三方より別て得の道小ど赴れり一吉

清正千センといふ所小着陣を此道十五日全羅道の府中ホリ

小忌此道此所古府よりけき在家二十余里あり又少地の山城あり城主開退れば城中宿城を放火を十六日ホキン小陣を此道

十七日カウ小陣を此道十八日千セン小着此道十九日ホも古城有て城主ハ十九日山谷を乗出少き原小押掛所北敵七八千出て清心先手加藤与左衛門尉と合戦一与左衛門尉が組下の

軍兵野合小乗放一置る馬共三三七濫を山谷引入れを自慶

尚道の古都小着陣を昔帝都の四路をまゝ家風なるる

次軒を争ふ高屋三十餘茶煙ありて大佛殿を建ちりり本堂の柱々五階六階の石の柱よりて廣き事日本の堂塔壁ききする

三門のききと本堂小起りりま而こよあは大道の廣き事寺の立振家居の作換何小付ても数人目を撃つ計りり

逗留しけきバ昔の朝大河内左衛門尉陣場の末申小あり山中に入此彼を一見し道小踏迷ひ夕日に及て帰りける知出

山路の事なるまは夜小入道を見し何を更小糸さるまは小麓小陣火の影多く見ゆ味方の陣とん好大を知ふ小出らまはとある



柳系りゅうけいに敵漫てきまんくと陣取居ちんきよゐて人馬にんばの食くを亦また不用意ふよういせし真中まんなかに  
 ちりける然しかども天運てんうん小や依よらん恙やあつく虎口こらを遁のがておと朝あさ  
 鮮せんの洞ほらをほひひひ密ひそ小忍しのび通とほりしを去されども月つきをふし闇やみ  
 衆しゆ小煙こえんも失うひ味方あじかたの陣何ちんなん地ぢるんとたどり来くるれふ人ひと  
 音遙おとさう小岡こおかゆ夜討ようちう小お敵てきるるべしと思おもひ能よくはありを岡おかは日ひ  
 本人おのれの聲こゑるる静しづ小立寄たてよ誰たれと同どう答こたへ曰いはは清正きよまさ軍士ぐんし成なりが  
 昨日きのうの合戦くわせん小馬こまと云いふ無念むねんに敵てき若わ夜討ようちう小も出でるることことま  
 り来きてはと答こたへ大河内おほくわい伴ばんの敵陣てきちんを教おして曰いは我われ只今ただいま討うちつるる見み  
 ては既すで小炊ひで未食まじくせむと見みしはるるや然しかしき時とき希まれなり鉄てつ  
 炮ぱう頻ひん小打掛うちか俄いつ小時ときと上あり無理むりを立たて小利せきを得え給たまへ某たれ

道ちう初しう之し小業内せうごうせんと云いふは各軍士おのれぐんし亦またきし敵小逢てきせうぶては沙さ追おひ  
 小帰せうきふひ給たまへ供申くわまう若わも奉ほう引ひの方かたと深ふか手を負おせ申まうふ  
 某共陣たれどもちん並ならぶ事こと成難なりがたしと祈いのちたまは大河内おほくわいと云いふ成なり  
 の刻とき計けい小やうく本陣ほんちん一いつ海うみりる清正きよまさの軍兵思ぐんべいおぼのままに討うちをま  
 一馬いば共とも餘あま多おほ濫取らんきよ首くび數かず少すく討うちるる勇進ゆうしんんで討うちるる廿日にじふにちの早朝さうちう大  
 河内おほくわい小屋こや一いつ各おのれ一いつ禮らい上あ来きり清正きよまさより一いつ礼らいの使つかいをま給たまへるる廿  
 二日ふたにち大佛殿おほぶつでんを先まとして洛中らくちうの在家ざいけ三十余よそあまり射軒しゃけん一字いちじも残のこさらず  
 放火はうかしられば夜中よちう小及およぶととも焰ほの光遠ひかりとほ里さとまで懸かりて只ただ白  
 晝ひる小異こゝろるるは廿廿にじふにじふ百古都ひやくこを立たててコキヤこきや小点こてん  
 此道このちう廿五日にじふごにち夜よ小追雷おひづらいあり廿六日にじふろくにちシし子こ小陣ちん五ご  
 五里ごり此道このちう廿四日にじふよちにちクくイい小海こゝろを  
 七里しちり此道このちう廿にじふ小他事たれごと取とり



中の山城あり麓より城まで二里四面の石垣の高サ四間半の  
 中より爰小二日逗留し城を破果を焼然共城中廣大せ辺  
 小して二百間三百間の米蔵限りるけまば二万三万の勢を  
 以て廿日三十日小焼尽し難き故小城中家蔵小火をうけ  
 其傳小して通りしを廿九日シ子を出て永川小中へ五里を  
 小来まらちの少い山谷合より少敵出て清正が先を破向ひ夫  
 を射け銃炮を打り終小時を揚ぐれ清正が先手の  
 軍兵を見て餘を討ちしと馬の足小任せてトエウツ里  
 一城組の加藤共左衛門尉止目を立るといふも乗散し  
 る若者共貝の音をも聞かざして武略の敵の色見せしむるを

実小敗北とせしむる山谷を退入せしむる山谷同左右の山の組あり  
 あき伏せし大敵一度小立より関を揚げて指し引詰射立打を  
 らあけ不味方働くども引退きも叶せし難儀小乃小三州  
 の住人宮地久藏と云ふの大久保相模も忠隣が家小立し不色  
 小立去て清正が幕下小居し本多重左衛門尉と名乗此本多大  
 音揚て数百の傍輩小云々るらいつに方角一ふ小立細細左右  
 の敵の的小成て淫るれ討死を志すにあり永川表の大場へ乗いて  
 實否の一戦小乃各法けと云まふ小一さん小駈出る敵付出るより  
 組を落上をトと返もあり鋒より大端を出して志のぎと刺り鐔  
 とりの火花とちりし一戦多一吉清正一陣小成て数刻打戦い敵餘



多討味方も多く討死に彼も多金左衛門尉敵一人と切結び暫  
 く戦所不龜の甲積の籠手づらん本多右の手とつ合一残して  
 切けを以既不太刀打討つれに寄の各敵を組伏て左の手もて突  
 殺息を吐て居りりふふを本多右等来て頭を刎落一本多  
 と馬ふみせんといふ奉多常心のいさゝる者るまは源を自る  
 右の腕先を踏三度まで踏切捨んとをいさゝる者るまは源を自る  
 め馬ふみきの勢本陣一川りぬ法人本多右最後の働を見そ天  
 晴大剛の兵裁周勃が有松角角有と感とる  
 永川の地形八川面八九町の大河東の山中とと物ふ流き出る  
 其北河水の源するの古股をせむ北大河北の岸ふ討て東西百餘

町南北三十余河の草原して人倫遠く爰ふ一吉清正と陣大川を  
 後ふあて陣を漸小屋掛せし如清正流石の猛將るるが如何心  
 臆らん大河を打渡り向の岸ふ陣を死一吉足を見て家中の兵  
 を召集するはあの主計を陣の石松か何ふ神をや今日の合戦小  
 辟易まき清正上非を不審る根子る河を越えれば予ふ一言  
 の理は有き事なるに一使をいさゝる越へて悉く引越と云事予  
 が分別不能は我の今日の合戦場を踏一川を後ふ當て爰ふ陣せ  
 んと思ふる何も如何と有るまは各畏て涉渡むを主計敵の法仕  
 方の失念を本多右神の雲を踏外しつらに似せしと申する死  
 一生の地ふく危し陣ありと云共一吉猛き名將るとは諸兵心



とく清て近所小大蔵の有しと幸と打破り大柵遠柵四重五重  
丈夫あ付て大筒中筒うけ双一近篝遠篝方ふ焼く敵の寄を付  
けり一吉大小轟て十騎騎来る共恐くは破れんと勇け  
る清正はをりて使を越某きり一の掛りたる成原小陣を  
此方一越しを然と云越一吉人ら勢をりは是陣を  
成原細明日申述一と答又清正其部金右衛門と使として花角  
一方一清陣を替らんと有るは一吉其部を召出敷度の内  
使少入満足致し去り給ふ有付同越まき由清正申一は  
小童吉吏今晚馬の鞍を何物も物の具を脱てゆくと休息を  
願一飛弾も付死せざる内其方一敵一人も通をまきと云

らら小言る其部ゆと等く清正大川を乗越来て一吉小対面  
清陣中家の小屋と申付て是非由同道はまき由再三詞を  
受て申ける一吉答て軍士とも苦勞致し柵の下までも付し  
を空く今更越難い今夜は一陣まきと有るは清正は非  
く本陣小乗ゆりたる一吉軍兵外士の柵の内小人の居長小穴  
を堀面一人は穴の中小忍居て前小大筒中筒うけ並て敵を所  
の篝火の光少十餘町間を見まき敵のさかりを聞知不安の  
ごとく夜半過る頃敵羣り来り三方を襲り多と銃炮を打  
響一近付ら駈散さんと待つけり敵多勢うりと云ともし勢  
小辟易し陣のと小寄寄せりて夜已小平坦及らと敵を山



谷引入ぬ一吉又軍兵小向て今日逗留せんと思物何有」と云  
 至各軍りて縦百目成共出意小但らきと一一夜討ち容易あ討ち  
 る者とぞ答け角て彼大花を見ま横十四五間堅五六十間よ  
 て厚サ八九寸の板をぬて罫りを圍ひ四方まんと小志て四口三間中  
 戸を立て二尺計の唐のの錠をおら一かり抑此を先年文祿の  
 津征伐小丹波少将秀久御加藤遠江此まて合戦一日本勢  
 数多討死あつり一後其甲冑戈戟鞍鎧等ふるまで悉れ集三千  
 餘人の枯骨骸を並之此倉の内よあめ置り石面三尺四方角石  
 を地よゆり立込をぐん形小切て其石小其時の年号目付合戦の  
 証と大文字小切付むく爰小清正が軍兵蟹江庄藏と云りのあり

彼が父庄藏小丹波秀久御少仕て此小て討死を彼が指物も長サ五  
 尺餘の一の條の葉角木小蟹江庄藏と書付て有るり清正の軍  
 兵も来て此倉を地これ庄藏之父の指物と見付出悲涙頻小  
 流しけり左るが父小對面の心地とて自小屋上持帰り傍輩  
 向て云々ハ父戦死の訃を見る事浅くぬまられ命を浪りに  
 敵を人討て己父が孝養小報せんと主君へ眼を置て悔日の  
 夜成の刻計小立出る諸人色制し金ども嘗て思ひ止るまて  
 大川を打渡りそことと志ぬ山谷一とどり行志を哀さるり  
 かりけり小日比近一々通せ傍輩二人見ぬ一難くやあひ  
 けん馬を早めて乗續るり庄藏をを見まあ何なる小事



某親の爲し捨身の思立るも各々論じ給くと極言棄と  
をせ共與人止り得んして只三騎分入ける心の内ぞ有難く角  
て三人より下立く響の響を止めを獨を以て馬の舌を巻地  
音をばして鎗の槍首を握一踏打の谷合ふけけたるは色  
孝感天心を動く事ふや夜討の敵の何心ぞ一人双びふ来  
るれと三人勇掛く突伏し續て来る敵の外勢を圍敷られ  
多少見ても悉く引退り其隙ふ三人面敵の首を提ける  
引あひひくと打棄るる響江父の敵を止めをけと  
と立敵の死骸と引立て勝り臆指責き望むを付け  
悦勇で陣をどゆりくる諸人そ代見て奇代の名柄無頼の

孝乃おと感涙を流したり又二人の傍輩命を捨て万死の  
友をうち刺高名其才堅固よゆ事古今為りふき勇士ハ  
清心と初て涙を流し給ひり初清心の本陣ふ一番貝二番貝と立  
りりとい共一吉の陣ふ貝と立けら依て清心と押前をゆく  
らふ十月朔日ふも還る次一吉が軍兵曾て睥と交けりて正  
陣ふと守らるるべけり永川の敵地ふ悠然と一吉在陣はと  
いども敵終ふ近付得る一吉軍兵小向て曰此表を出る夜中  
ふ川と流さる敵川の瀬ハ知り川水小乗ひりて夜合戦ふ結  
づ然月子一敵味方見分難く見若く明方の卯の刻ふ出陣  
龜とあり諸兵畏て二日の曙小小荷駱夫丸等且弱き者共



残らば先へ渡り軍兵共一吉小向て山馬を渡さるべしと云れ  
 一吉乗一吉向て軍士一同小越と云り軍兵又云る此度  
 類の陣をとり此上の切めと申せば川越きりに極まり早  
 法越あつて向の堤小馬渡を立らるべし若軍兵一吉小越の時  
 節大敵出て山馬駿と慕ひ川水小乗入鉄炮を打掛我と批  
 て欺ふげは心後を建たざる事有べし其時清正の加勢として  
 出張あつて清正の心不有べしと理とせめて申せば一吉を  
 旗を進め乗入向の岸小立備るを見え軍士を陣を先と  
 小屋悉く自焼して川の半に乘入れれば業のごとく敵一万余川  
 岸小乗出て鉄炮を打ち寄り軍士川中して敵の方馬と乗

向を岡と城として引返り静々と味方の陣一乗上と一吉清正と  
 先として諸軍兵あつて小吉今無双の退振りとを譽りたり其  
 日永坦小陣と取此道此所より又聯合の合戦ありも将一軍を成て戦  
 敵少く付れた味方も少く討死は三日慶州小着陣は此道は常  
 の舊跡をば内裏の殿中大佛殿より明小聖験殊勝の寺も崇  
 麗を並治中の高屋活外の民屋三十余軒有て富貴の地なり  
 小十八階ある撞樓あり撞木の當る蓮花八九尺四方と丸くは  
 有此小運雷一禁中殿を先として一字を味方を放火す七日キラ小  
 陣を此道八日慶尚道新山と云海際まで帰陣を此道此所海邊と  
 云自由第一の地なりは後より越年をてとて海を後より過て小屋



丈夫の掛前つかけまへの左右さゆう三方さんぽうの二間にま口のあゝ堀ほりをとり大柵おほしほ五重ごじゆうの付つけと  
 出入でいりの口々くちが千鳥ちどりのあけ遠とほの柵しほ一重いちじゆうの口々くちが大須戸おほすど丈夫ぢゆうぶの付つけと柵しほ  
 内うちの敷しきとの櫓やぐらをあゝ遠とほ見外みそときく番ばんを置おき柵しほの外がらハ五ごと七しちの  
 小篝こかき火ひを焼や明あけ系けい

朝鮮物語卷之上終



